

## 個人化する地域社会における寺院の役割

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学人文社会科学部社会学科文化人類学コース 公開日: 2019-03-18 キーワード: 185 作成者: 渡邊, 優歌 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/00026295">http://hdl.handle.net/10297/00026295</a>

# 個人化する地域社会における寺院の役割

渡邊優歌

- 1 はじめに
- 2 寺院の社会的役割の歴史の変遷
  - 2.1 寺院の社会的役割の歴史の変遷
  - 2.2 由比の寺院の概要
- 3 寺院と檀家の関係の変化
  - 3.1 讚徳寺の七面天女祭り
  - 3.2 不動院の縁日とお祓い
  - 3.3 宝積寺での御詠歌の練習
- 4 新たな信仰のきっかけをつくることを目指す寺院の行事やイベント
  - 4.1 最明寺での節分、観音祭、お寺で SHOW!!
  - 4.2 本光寺での年中行事
  - 4.3 延命寺で開催されるイベント「ハピネスパーク」
- 5 考察：寺院・地域・個人を結ぶ新たな関係
- 6 おわりに

## 1 はじめに

私をはじめて由比を訪れた時、観光案内板を見て、寺院の多さに驚いた。それをきっかけに、由比に寺院が多い理由や、他の地域と比べて寺院と人びととの関係にどのような違いがあるのかということに興味を持ち、寺院をテーマに調査しようと考えた。事前調査の段階で、日本の仏教寺院が抱える様々な問題が見えてきた。鶴飼秀徳によれば、全国の寺院が檀家の減少、無住寺院の増加、住職の高齢化などで消滅の危機にあり、また、こうした寺院内部の問題だけでなく、檀家の側にも、葬式の簡略化、核家族化などによる宗教離れが起り、その結果、寺院から人びとの足が遠のいているという（鶴飼 2015）。さらに宗教離れの要因として挙げられるのが個人化である。ウルリッヒ・ベックらが提起する個人化という概念について、鈴木宗徳（2015）は次のように説明している。

家族・階級・企業などさまざまな中間集団から個人が解き放たれることにより、個人による自己選択の余地が拡大するとともに、これらの集団によって標準化されていた個人の人生が多様化し、失業や離婚など人生上のさまざまなリスクを個人が処理することを余儀なくされるという一連の現象（鈴木 2005：2）。

つまり、イエや地域社会などの中間集団から個人が解き放たれたことで、それらの集団と深くつながっていた寺院からも遠ざかっているということである。本章では、これらの事実について寺院はどのように向き合い、自らの役割を見出しているのかということを中心にしていきたい。

## 2 寺院の社会的役割の歴史の変遷

本節では、寺院が社会的に担ってきた役割の歴史の変遷を整理して述べた後に、調査をおこなった由比にある寺院の名称や宗派、立地などの概要を記す。

### 2.1 寺院の社会的役割の歴史の変遷

はじめに、日本における仏教の変遷と、社会における寺院の役割がどのように変化してきたのかについてまとめる。鷹野良宏（2004）の整理に依拠すれば、日本に仏教が伝来したのは6世紀のことである。588年、蘇我馬子によって日本最古の寺院である法興寺（飛鳥寺）が建立された。それから現代に至るまで、仏教の普及の中心地としての役割はもちろんのこと、寺院は日本社会の中で様々な役割を担ってきた。

仏教が伝わって間もなくの古代日本では、国分寺や国分尼寺が全国に建てられ、仏教の力で飢饉や疫病を鎮め、国を治めることが目指された。また、豪族がそれぞれの氏族の祖先を祀るための「氏寺」を建てるなど、従来の祖先崇拜と結びついた部分も見られた。さらに、農学、医学、薬学、経典など様々な分野について書かれた渡来の書物が寺院に持ち込まれ、異国人僧侶の指導のもと、解説が進められた。寺院は現代でいう総合大学や大学院のような役割を担っていたといえる。鎌倉時代や室町時代には、大名や上級武士の息子が通うような学校としての機能ももち、これが江戸時代には庶民にも広がり、寺子屋となった。

また、清水海隆著の『仏教福祉』（2003）によれば、教育以外の面でも、身体障害者や孤児、病人、身寄りのない老人など社会的弱者の保護、東洋医学を用いた医療技術の提供、道路、橋、池などの整備といった土木事業など、寺院による社会福祉的な活動は古代からおこなわれていたようだ（清水 2003）。中世になると寺院の持つ権力は強まり、能や雅楽、華道、茶道、祭りなど、あらゆる文化の発信地にもなった。江戸時代になると、島原・天草の乱を機に、キリスト教徒の取り締まりを目的とした「寺請制度」が整えられた。人びとは地域の寺院の檀家となり、出生、婚姻、奉公、修行などで出郷する際や、死亡などで家族構成

が変わる度に指定された寺院に届け出ることが義務付けられた。檀家が居住地を離れる際は、寺院が身分証明の寺請け証文や宗旨手形を発給した。寺院は檀家の管理や身分証明書の発行など、現代でいう役所のような役割があった。また、檀家の葬儀や命日など仏事での読経といった、現代でも一般的に見られる役割も担った。これに対し檀家はお布施を払うなど寺院の宗教活動の支援をするという寺院と檀家の相互関係が成り立った（鷹野 2004）。

こうして寺院と檀家、そして檀家同士が隣組などによってつながる地縁や血縁が基本となる地域社会が形成されていった。しかし、明治に入り、大政奉還がおこなわれると、神仏分離の令が発布され、国家神道に基づいた国家統治が目指されるようになった。これを受け、廃仏毀釈が起り、多くの寺院や仏像が破却されるなどの被害を受けた。戦後に日本国憲法が施行され信教の自由が認められるまで神道の特権は続いた。その後は政教分離が推し進められ、政治と宗教の結びつきは解体されていった。

このように古代から現代に至るまで様々な役割を担い立場を変えてきた仏教だが、現代では、前節にもあるとおり、宗教離れが起り、葬式のときしか仏教が必要とされないという意味で「葬式仏教」という言葉が使われることもある。こうした状況は、寺院の数が多いう由比においても同様に見られ、葬式や法事以外で寺院に行くことはほとんどないという住民も多かった。次項では由比の寺院の名称や宗派、立地などの概要を示す。

## 2.2 由比の寺院の概要

由比には、臨済宗妙心寺派寺院 8 ヲ寺、日蓮宗寺院 4 ヲ寺、浄土宗寺院 1 ヲ寺、真言宗醍醐寺派寺院 1 ヲ寺、曹洞宗寺院 1 ヲ寺の計 15 ヲ寺の寺院がある。図 1 は由比の地図で、それぞれの寺院の所在地は地図上に▼印で示している。今回、聞き取り、参与観察をおこなった寺院は、図中で寺院名を○で囲った 5 ヲ寺である。寺院の名称と宗派、所在地、および檀家の有無は表 1 のとおりである。

由比にある 15 ヲ寺は由比仏教会という組織を形成している。由比仏教会では、年に 2 回托鉢をおこなっており、西は倉澤、北は入山、東は蒲原地区との区境に近い神沢川酒造のあたりまで由比内を歩くという。4 月にはこども園を訪問して花まつりを開催し、園児たちに簡単な法話をするほか、夏には戦没者や漁で亡くなった人の慰霊祭も開催している。また、年間を通じて、義援金や車いすの寄贈など様々な活動をおこなっている。

1923（大正 12）年、関東大震災の直後に出された「国民精神作興に関する詔書」に応じて 1924（大正 13）年、庵原郡会長により「庵原郡仏教奉詔会」が結成された。これを母胎として 1932（昭和 7）年「庵原仏教会」が設立され、その分会として「由比仏教会」が生まれた。現在は、公益財団法人・全日本仏教会 W F B（世界仏教徒連盟）日本センター（以下、全日本仏教会）の中の静岡県仏教会の由比支部として活動している。全日本仏教会のホームページによれば、全日本仏教会には 59 の宗派、36 の都道府県仏教会、10 の仏教団体の計 105 団体が加盟し、仏教文化の宣揚と世界平和に寄与することを目的として仏教徒会議を開くほか、災害時の救援活動や国際交流など様々な活動をおこなっている（全日本仏教会ホー



寺院名	宗派	大字	檀家の有無
慈徳寺	臨済宗妙心寺派	由比	有
大法寺	臨済宗妙心寺派	由比	有
正法寺	日蓮宗	由比	有
延命寺	浄土宗	由比	有
本光寺	日蓮宗	室ヶ谷	有
林香寺	臨済宗妙心寺派	東山寺	有
常円寺	臨済宗妙心寺派	阿僧	有
妙栄寺	日蓮宗	北田	有
桃源寺	臨済宗妙心寺派	町屋原	有
地持院	臨済宗妙心寺派	町屋原	有
最明寺	臨済宗妙心寺派	町屋原	有
不動院	真言宗醍醐派	今宿	無
讚徳寺	日蓮宗	寺尾	有
潮音寺	臨済宗妙心寺派	寺尾	有
宝積寺	曹洞宗	西倉澤	有

表 1 由比地区内の寺院一覧（出典：由比町誌を元に渡邊作成）

### 3 寺院と檀家の関係の変化

本節では、前節で述べた先祖供養、葬儀以外の宗教行事において、寺院と檀家とのかかわりに変化が見られることを明らかにする。事例として挙げるのは、小規模になっても続けられる讚徳寺の七面天女祭り、不動信仰の下ゆるやかに集まりおこなわれる不動院の縁日やお祓い、大切なコミュニケーションの場となっている宝積寺での御詠歌の練習である。

#### 3.1 讚徳寺の七面天女祭り

寺尾地区にある日蓮宗寺院・海上山・讚徳寺（以下、讚徳寺）で、住職である大石英修さん（男性、43歳）に話を聞いた。讚徳寺の境内にある七面堂には、七面天女像が祀られている（写真1）。『仏教民俗事典』（1986）によれば、七面天女は吉祥天や弁財天とも呼ばれ、元来はインドの音楽・智慧の神、サラスヴァティ女神で、日本には仏教の女神として伝わり、音楽、弁舌、財富、知恵、延寿などの徳があるとされているという。（仏教民俗辞典 1986：340）。また、日蓮宗の総本山である久遠寺のホームページによれば、七面天女は日蓮宗において法華経を守護する女神で、人びとに心の安らぎと満足を与えるとき

れている（日蓮宗総本山身延山久遠寺ホームページ）。讚徳寺の七面天女像は、1716（正徳6）年、近村に蔓延した疫病を鎮めるために清水区伊佐市にある安穩寺から移されたものと伝えられている。毎年4月、讚徳寺では七面天女祭りを開催し、普段は閉じている七面堂を開き、七面天女像を参詣客に公開する。祭り当日、参詣客には七面天女の紋が刻まれた葛湯の素と、「日々の生活を病気やけがからお守りする」という七面天女の御利益があるお守りや札を配る。



写真1 讚徳寺に祀られている七面天女像（渡邊撮影）

住職や地域の人びとから「七面さんのお祭り」と呼ばれるこの祭りは、いつごろ始まったものか、詳しくはわかっていない。昭和初期からは祭りの一環として地域の子どもの奉納相撲をおこなうようになった<sup>3</sup>。奉納相撲の運営は、寺尾地区の男性たちが組織する相撲愛好会が担っていた。当初は讚徳寺の境内に、祭りの2、3日前から土俵をつくっていたが、讚徳寺の敷地の狭さや土俵をつくる労力などの問題で、1945（昭和20）年頃からは讚徳寺近くの宗像神社に常設の土俵をつくり、そこで相撲大会を開催するようになった。寺尾地区だけでなく由比全体から子どもたちが集まって奉納相撲に出場したり、たくさんのお店が並んだり、とてもにぎわいを見せた時期もあったそうである。しかし、過疎化や少子高齢化の影響でしだいに参加者は減り、1994（平成6）年頃には出店は2軒ほどになり、2011（平成23）年を最後に奉納相撲もなくなった。現在、祭りは讚徳寺のみで小規模に開催されており、出店もない。こうした現状に対して、讚徳寺の住職である大

<sup>3</sup> 由比地区の奉納相撲については、『2017（平成29）年度フィールドワーク実習報告書（静岡市由比入山・由比川流域）』の第4章で、高橋啓汰が詳しく報告している。

石さんは、「以前は讚徳寺というよりも、寺尾地区の祭りとしてやっていた部分もあった。規模や内容がどうであれ、過去からやってきた地域の伝統でもあるから、続けていかなければならないと思っている」と話してくれた。

### 3.2 不動院の縁日とお祓い

今宿地区に位置する真言宗寺院・円相山・不動院（以下、不動院）は檀家制度をとっていない、いわゆる祈祷寺である。不動院には檀家ではなく、「お不動さんが好きな人」が自由に集まる。私は5月28日、月に一度の縁日を見学した。参加者は由比に住む人が多いが、なかには富士宮市など地区外から来る人もいた。縁日では法印<sup>4</sup>の堀健晃さん（男性、52歳）が写真2のように読経し、参詣客がそれぞれ願いを書いた札を護摩の炎の中に入れていった。一連の儀礼の後、堀さんの法話を聴いて解散となった。

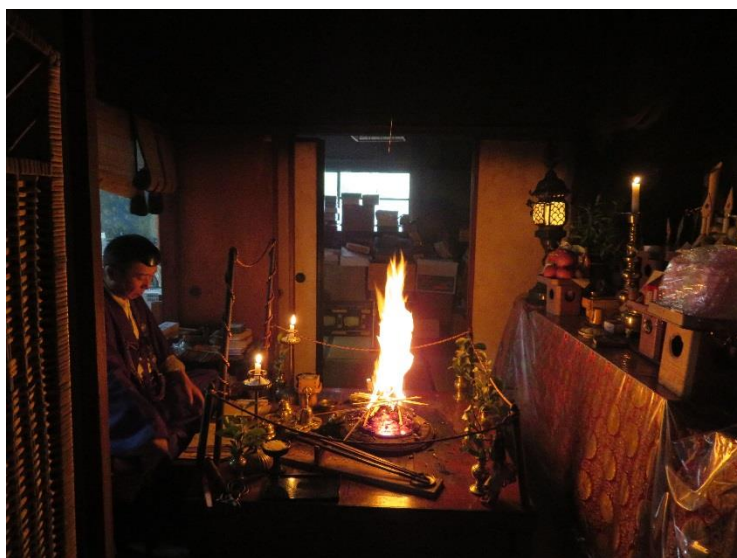


写真2 不動院の縁日での堀さんの読経の様子（渡邊撮影）

お祓いについても話を聞いた。堀さんによると、由比は昔から漁業が盛んであるため、海に対する信仰があるという。女性や人の死は穢れ（気枯れ）として扱われ、海から遠ざけられてきた。海には女神がいて、船に女性が乗ると女神が嫉妬するから、漁獲量が減ったり、船が危険な目に遭ったりするという。そのことから船に女性を乗せることを嫌う人もいたとのことである。また、先述したとおり、由比では隣保班が葬式の運営を手伝う。隣保班には漁師がいることもあり、葬式の後には死の穢れが海に移らないようにとお祓い<sup>5</sup>を

---

<sup>4</sup> 修験や密教系の寺僧。

<sup>5</sup> 一般にお祓いは神社でおこなうものだが、『日本民俗事典』（1972）によれば、神道の影響を受けた密教系の修験者で、加持祈祷をする法印は氏神の祈祷やお祓いもおこなう（大塚民俗学会編 1972）。

することもあるという。その他、不動院では荒神祓いや新しい土地、家、船、車のお祓いなどもおこなっている。このように、不動院では個人が自由に寺院に集まっている。

### 3.3 宝積寺でのご詠歌の練習

倉沢地区にある曹洞宗寺院・倉澤山・宝積寺（以下、宝積寺）では月に一度、檀家が集まって御詠歌を練習する会がある。5月28日、私はその会を見学した。檀家の70代女性3人と住職夫人が、住職の孫で副住職の手塚裕太さん（男性、28歳）とともに御詠歌を詠みあげた。ひととおり詠み終わったところで、副住職の手塚さんが宝積寺の歴史や仏教の教えについてわかりやすい言葉で説明した。練習は20分から30分ほどで終わり、その後は女性たちのおしゃべりの時間になった。話す内容は他愛のない世間話や近況報告などだった。以前は参加者も現在より多く30人ほどいた時もあったという。檀家の高齢化や、以前まで御詠歌を教えていた住職夫人が病に倒れ、続けられなくなった影響でしだいに回数や参加人数が減少し、現在に至っているそうである。この集まりは単なる寺院の行事というだけでなく、参加者たちが互いに言葉を交すことでくつろいだり、情報交換したりする大切な場となっているようだった。また、檀家の女性たちが、以前におこなわれた寺院の行事の感想や意見を手塚さんに伝える様子も見られ、住職や副住職と檀家が顔を合わせてコミュニケーションをとる重要な機会となっているようであった。

手塚さんは、少子高齢化などの影響で檀家が減っていくのは仕方のないことかもしれないと話し、この事実の一つの時代の流れとして受け止め、檀家数の獲得や維持に躍起になるのではなく、自分たちにできることをしていきたい、お寺は檀家であるかどうかに関わらず、仏教に気軽に触れられる場所、地域の人びとの憩いの場所としてもっと開放していきたい、とも述べていた。

以上に見てきたように、宝積寺での御詠歌の練習は、参加者が減少していく中で、従来ほどイエを基本とした檀家が意識されず、個人としての檀家が集まるコミュニケーションの場になっているようだった。

## 4 新たな信仰のきっかけをつくることを目指す寺院の行事やイベント

これまでは、讚徳寺、不動院、宝積寺が個別に主催する宗教行事とそれが生み出す檀家とのつながりについて見てきた。これに続く本節では、近年において最明寺、本光寺、延命寺の境内で実施し、檀家の枠を超えて幅広い人たちを集めるイベントに注目する。こうした活動が、檀家、あるいはそれ以外の人びとが寺院、宗教行事に対して持つ関心をどう変化させるのかについて考えてゆきたい。

### 4.1 最明寺での節分、観音祭、お寺でSHOW!!

町屋原地区にある臨濟宗・妙心寺派寺院・仏光山・最明寺（以下、最明寺）では、特に子どもたちが楽しむことを重視した年中行事やイベントをおこなっている。2月3日の節分では、境内で住職が御詠歌を詠んだあと、豆をまくとロック音楽とともに鬼が登場するという演出をおこなっている。参加する子どもたちの中には鬼の怖さで泣いてしまう子もいるそうだが、実はお菓子をくれる優しい鬼だという。また、8月には「観音祭」を開催している。当日には観音堂を開き、住職の読経で祭りを始める。檀家の女性部を中心に模擬店を企画したり、飲食店を経営している檀家などに声をかけ、屋台を出してもらったりする。焼鳥、焼きそば、かき氷、金魚すくい、スーパーボールすくいなどの屋台が並ぶ。また、各地域を役員がまわって、回収した不用品をバザーで販売することもおこなっている。腕相撲や押し相撲などの誰もが楽しめるゲーム大会も祭りを盛り上げるという。さらに節分と観音祭りでは、はずれなしで豪華景品も当たる抽選会があり、抽選会目当てで祭りを訪れる人もいるようだ。これらの祭りには檀家はもちろんのこと、チラシで宣伝することで、由比全域から客がやってくるそうだ（写真3）。

その他、毎年秋に開かれる「お寺でSHOW!!」というイベントは意外性や話題性を追求し、訪れる人を楽しませている。このイベントは、もともと「hinatabocco」という団体のファッションショーのイベントに、最明寺の敷地を会場として提供したことから始まった。翌年からはhinatabocco から企画を引き継ぎ、最明寺主催でイベントを続けている。現在は、ファッションショーはおこなっていないそうだが、子どもも参加できる簡単なワークショップや、軽食や雑貨、衣服の販売などをおこない、さらにはロックバンドなどのライブも開催される。「お寺でSHOW!!」は、客層を幅広く設定しているため、チラシやSNSでイベントの告知や宣伝をしている。そのため、由比だけでなく静岡や富士などから



写真3 最明寺周辺に貼られていた節分祭のチラシ（渡邊撮影）

訪れる人も多い。

最明寺ではどの行事も、特に子どもたちに楽しんでもらうことを意識している。その理由を住職の瀧川秀樹さん（男性、42歳）は次のように話していた。

子どもが楽しそうにしていると、それを見た大人たちも楽しくなる。お寺といえば葬式や法事と結びつけて暗い場所だと思われがちだが、寺にだって喜怒哀楽があっていい。楽しい行事がお寺に足を運ぶきっかけになってほしいという思いがある。また、子どもたちの最明寺での楽しかった経験が、大人になったときどれほど印象に残っているのか、次の世代の子どもたちにどのように伝えられるのか、それぞれの檀那寺との付き合い方にどのような影響を与えるのかということを見ていくのが楽しみでもある（2018年5月30日聞き取り）。

近年、宗教離れや寺離れを瀧川さん自身が強く実感する中で、いかに人びとに寺院に来てもらうか、日々考えているという。寺院や住職の個性を活かした個性的なイベントや行事の開催、情報発信が重要で、寺院側から積極的に声をかけ、働きかけていかなければいけない。しかし、様々な活動を考える上で、「お金儲けではない」ということは強く意識しているという。目的は、寺院が楽しい場所だと知ってもらうこと、仏教に触れてもらうことであり、イベントや行事はあくまでもそのきっかけである。「寺院が人びとに頼られる場所、いつも隣にある存在でありたい」とも、瀧川さんは語っていた。

以上に見てきたように、最明寺では従来までの檀家との付き合いだけでなく、由比内外から人を集める行事やイベントを開催し、子どもたちをはじめ訪れる人びとが楽しめることを目標に活動している。住職は寺院が楽しい場所であると知ってもらうことが寺院と人が新たにつながり、宗教離れなどの問題を食い止めるきっかけになることを期待している。

次項では本光寺における年中行事について見てゆく。

## 4.2 本光寺での年中行事

由比地区にある日蓮宗寺院・霊瑞山・本光寺（以下、本光寺）には年中行事で由比内外からたくさんの方が訪れる。住職の大石純厚さん（男性、77歳）によると、年中行事で本光寺を訪れる人の数は年々増加しているそうである。

12月31日から元日にかけては、除夜の鐘や初詣の参拝客のために1,000食ほどの年越しそばを用意するが、実際に本光寺を訪れる人の数はそれを上回るという。「本光に（本当に）おいしいじゅみょうそば」というキャッチフレーズや「背筋を伸ばして姿勢よく、明るく元気にご挨拶」という標語を掲げ、参拝客に前向きで希望のある年越しをしてもらうよう心がけている。2月3日には節分祭があり、朝6時から厄除けの豆まきやはずれなしのくじ引きをおこなう。本光寺の節分は回覧板で地域の人に知らされるため、冬の早朝

であるにも関わらず、2018年は160人もの人が集まったそうだ。

4月には春祭り（開宗式〔かいしゅうしき〕）がある。日蓮聖人がはじめて教えを説いた日を祝う祭りである。この祭りでは、由比の地域おこし団体である「そこっと」の協力のもと、境内で「結市（むすびいち）」という朝市を開く<sup>6</sup>。結市には由比や蒲原から15軒ほどが出店する。由比や蒲原で、7,000枚から8,000枚のチラシを配布して宣伝し、祭り当日はたくさんの方が訪れる。8月16日には盆踊りで祖先の霊を慰め、送り出す。清水区内から盆踊りを踊るグループである「連」がいくつか集まり、踊りを披露する。11月3日は秋祭り（御会式〔おえしき〕）が開催される。日蓮聖人の命日を偲び、徳を讃える祭りで、内容は春祭りとはほぼ同じで境内に朝市を展開する。さらに秋祭りでは近くの日蓮宗寺院と合同で万灯行列をおこなう。以上に述べてきた本光寺の年中行事は、表2にもまとめているので参考にしてほしい。

12月31日	大晦日	除夜の鐘、年越しそば
1月1日	元旦	初詣
2月3日	節分	豆まき、くじ引き
4月29日	春祭り（開宗式）	結市
8月3日	施餓鬼	檀家が集まって供養
8月16日	慰霊の盆踊り	清水区内から盆踊り連参加
11月3日	秋祭り（御会式）	結市、万灯行列

表2 本光寺の年中行事（出典：聞き取り調査を元に渡邊作成）

このように本光寺には、年間の行事をとおして檀家だけでなく由比地区外からも大勢の人が訪れている。住職の大石さんは、「信仰だけでは人は集まらない」とし、「寺離れ、葬式離れ、宗教離れがさげられる中で、寺に足を運んでもらうためには、信仰、健康、観光がそろっていなければいけない」という考えを述べていた。すなわち、信仰と合わせて、空気が良く自然が豊かであるといった健康につながる要素、季節の花が咲き景色が美しいといった観光につながる要素がそろって、人が来てくれるようになるということである。また、寺院の雰囲気や住職の人柄も重要で、常に「また本光寺に行ってみたい」と思ってもらえるよう、元気や笑顔を絶やさないように心がけているという。大石さんは、ただ人を集めるだけではないとも考えており、「来てくれた人びとに対して、寺としての役割を果たしていかなければいけない。社会やみんなのためにならなければお寺の意味がなくなる」とも語っていた。

<sup>6</sup>「結市」を運営する由比朝市の会「そこっと」の活動については、貝瀬彩華著の第1章に詳しい。

以上に見てきたように、本光寺でも、住職の様々なとりくみや地域おこし団体との協力で、檀家に限らず由比内外から大勢の客を集めている。このような檀家に限らない個人との新たなつながりは、寺院として人びとの心に寄り添うきっかけを生み出しているのである。そしてこのつながりは従来の地域にとらわれない、より広い範囲で寺院と個人との結びつきをつくっているといえる。

ここまで、寺院が人を集めるために主催している行事やイベントについて述べてきたが、次項では地域おこし団体主催のイベント「ハピネスパーク」に会場を提供している延命寺について述べる。

### 4.3 延命寺で開催されるイベント「ハピネスパーク」

由比地区の浄土宗寺院・松石山・延命寺（以下、延命寺）では、2016年から年に1度、女性主催のイベント「ハピネスパーク」が開催されている。このイベントを運営している、「ハピ女実行委員会」のメンバーの1人で洋菓子店「Patisserie Mere Pere（パティスリー・メールペール）」のオーナーパティシエである小野智子さん（女性、46歳、由比地区在住）に話を聞いた。「ハピネスパーク」は女性が主体となって由比を活気づけようとするイベントで、由比や蒲原に住む、技術を活かして働く女性がワークショップや商品販売などをおこなっている。「ハピネスパーク」では小野さん自身もスイーツの販売をしている。その他、サロンやアロママッサージから手芸や工作まで幅広いブースがある。由比内外から老若男女問わず多くの客が訪れるそうである。

小野さんによれば、イベントを開催する上で最も苦労したのは「場所」に関する問題だったという。当初は公共の施設、例えば地域の生涯学習交流館などでの開催を想定していたそうだが、利用基準の厳しさや申請の手順の複雑さが問題となっただけでなく、小野さんから聞いた話を受けて、清水区の生涯学習交流館の利用基準を調べてみたところ、ホームページに「市民に呼びかける営利的行為、政治的行為、宗教的行為はご利用できません。講師が利用団体として登録し、利用する行為は私塾とみなしますので、ご利用できません」との記載があった（静岡市清水区生涯学習交流館ホームページ）。

この基準にのっとると、イベントでの売り上げがそのまま個人の売り上げになっているハピネスパークはたしかに交流館を利用することができない。また、利用申請するにあたっては、初利用時にはあらかじめ交流館に足を運んで手続きしなければならず、利用者登録には1週間かかる場合もあるなど、手間がかかる。こうした状況で、ハピ女実行委員会のメンバーが悩んだ末に思いついたのが「延命寺」だったそうだ。もともと実行委員のメンバーの数人が延命寺の住職と顔見知りだったこと、広い土地があること、屋外（境内）でも屋内（本堂）でも活動ができることなどイベントに必要な条件がそろっていた。また、住職の人柄やこれまでの活動から、受け入れてくれるのではないかとということになり、話をもち掛けると快諾してもらえたそうだ。「お寺だからというよりは、『延命寺』だからという理由で頼んだ」と小野さんは語った。イベントでは住職が先生になって数珠を

つくるワークショップも開いており、予想以上の人気を集めているという。このように、地域おこし団体が不特定多数の人に開かれた会場として延命寺を利用し、ハピネスパークを開催することで、寺院に来ることを目的としない人びとと寺院との思いがけないつながりを生み、訪れた人が仏教に触れるきっかけをつくっている。

以上、最明寺、本光寺、延命寺を会場として、檀家だけでなく地区内外から人を集めているイベントについて述べてきた。最明寺や本光寺では寺院が、延命寺では地域おこし団体が主催となって、おそらく普段は仏教や寺院に対してそれほど強い思いを持っているわけではない人びとを集め、これまでにない新しい寺院のイメージをつくっている。これらの行事やイベントに訪れる人と寺院とのつながりは、個人の選択が生み出す流動的で変更可能なつながりであり、従来の血縁や地縁で固められた地域社会におけるそれとは異なるものといえる。

## 5 考察：寺院・地域・個人を結ぶ新たな関係について

これまで、行事をとおして見えてきた、現代における寺院と檀家の関係の変化と、新たな信仰のきっかけをつくることを目指す寺院の行事やイベントについて述べてきた。ここからはこれらがつくりだす寺院・地域・個人を結ぶ新たな関係について考えていきたい。

寺請制度が定められて以降、寺院と檀家の相互関係と檀家同士の相互関係は「地域社会」と呼べるつながりをつくってきた。寺院は檀家に宗教的な知識を提供し、葬儀や祖先供養、祭りなどの儀礼をとりおこなってきた。これに対し、檀家は寺院のこれらの宗教活動を、お布施を渡すことなどでサポートしてきた。また、葬儀などの寺院を中心とした行事では、檀家同士は隣保班などをとおしてつながってきた。これら地域社会を生み出す寺院と檀家の関係は個人を包括する血縁集団としてのイエを介して成り立っていたといえる。

しかし、現代ではグローバル化が進み、個人の生活圏が拡大し、人生の選択肢が増え、生き方が多様化していく中で、従来の人びとの生活の場やよりどころになっていたものが必ずしも価値を持たなくなってきた。第1節でも述べた「個人化」が進み、それに伴ってイエを介した檀家の概念が変化してきているのである。

第3節で讚徳寺の七面天女祭や宝積寺の御詠歌の練習会に参加する人びとは「檀家」と呼ばれているが、それは個人であってイエ的な集団ではない。また、不動院の縁日に集まる人やお祓いをしてもらう人びともイエ的な集団に包括されているのではなく、それぞれ個人の自由な選択の下でゆるやかに参加しているといえる。つまり、イエ的な集団に縛られ、強制的に参加しているのではなく、個々人が参加することを選んでいるのである。

さらに第4節で、由比内外から人を集める寺院の行事やイベントに参加しているのも個人である。このように、個人化していく現代において、住職たちがより強く意識するのが

「個に寄り添う寺院」である。本光寺の住職である大石さんは、「死者ばかりを相手にしている、寺は衰退する一方だ」と語る。人びとが幸せに生きるためのサポートやアドバイスをすることが寺院の重要な役割であると大石さんは考えている。誰しも思い悩むときがあり、限りある人生を悔いなく生きたいという思いがある。ひとりひとりのそういった気持ちに寄り添うことこそが寺院として人びとの役に立つことだ。大石さんのこの考え方は、寺院での終活のサポートにも表れている。どんな死に方をするかを考えることは、満足して死ぬにはどう生きるか、ということを考えることにつながる。大石さんは生き方や、生活の中での気持ちの在り方について考えたことを、毎月手紙にして希望者に届けている。また、葬儀の際は故人の供養だけでなく、大切な人を失った遺族の心に寄り添うことを心がけ、「お別れにあたって」と題したリーフレットを手渡している。年中行事や年忌法要などで本光寺を訪れた人びとには、本光寺に来てよかったと思ってもらえるように、幸せに生きる上で参考になる話をするを心がけているそうだ。

個人の生き方に寄り添う活動は他の寺院でも聞くことができた。最明寺では同じ宗派の若手住職たちで企画協力し、寺院の本堂で婚活イベントを開催している。宝積寺の副住職である手塚さんは、街のカフェに住職が赴いて人びとの話を聴いたり、人生相談にのったりする「ほとけカプチーノ」というイベントをおこなっているそうだ。このように従来のイエとのつながりではなく、寺院を利用する個人をより強く意識した活動が盛んになっているのである。

しかし、個人化が進む中で、それまで寺院や人びとを結び付けていた地域社会がまったくなくなってしまったというわけではない。これまでとは違った形で再編されていっているのではないだろうか。たとえば、これまではイエを基本とした檀家との関係を基本として寺院をとりまく地域社会がつくられていた。しかし、現代においては、地域おこし団体などと協力することで、寺院が帰属する地域社会は、由比全体、あるいはそれ以上へと拡大しつつある。住職たちはその中で人びとに貢献することを目指しているように思われた。このことは由比仏教会の活動からも見受けられる。

寺院と人との関係はイエ的な集団を介したつながりから個人とのつながりに変化してきた。これを受け、一部の寺院が個人に寄り添うきっかけとしておこなっているのが年中行事やイベントである。そして、イベントや行事をきっかけに集まった個々人が寺院と幾重にもつながることで、個人と寺院の間に新たな社会関係が生まれているのである。この寺院をとりまく状況は、地域おこし団体などのアクターが由比で活動する中で生み出す「地域」のかたちとも重なって、これまでとは異なる新たな地域社会を生み出す可能性をもっている。寺院と人びととの選択可能でゆるやかなつながりは、個人化する現代において、人びとの新たなよりどころとなるのかもしれない。

## 6 おわりに

今回、寺院について調査をおこなうまで、私はそれほど寺院という場所に行ったり、寺院の行事に参加したりしたことがなかった。そのため寺院の内部のことや現状についての話など、初めて見聞きすることも多くとても貴重な体験になった。

当然のことではあるが、一言で「寺離れ」、「檀家の減少」などといっても、やはり住職ひとりひとりにそれぞれの想いがあり、5つの寺を見れば5とおりの考え方や活動があるのだということにあらためて気づくことができた。また一方で、寺院に人を集めたい、個人の心に寄り添いたいといった共通した思いも見つかった。由比仏教会の活動以外で由比内の寺院が関わり合うことはほとんどないとのことだったが、これから先、寺院をとりまく地域社会の変容が寺院同士の関係にも変化を与えていくかもしれない。

## 謝辞

調査にご協力くださった皆様、貴重なお話をたくさん聞かせていただき、本当にありがとうございました。私のつたないインタビューにも親身になって答えてくださった皆様のおかげで充実した調査になりました。心より感謝いたします。

## 参考文献

鶴飼秀徳

2015 『寺院消滅 失われる「地方」と「宗教』日経 BP 社。

大塚民俗学会編

1972 『日本民俗事典』弘文堂。

静岡市清水区生涯学習交流館

2018 「貸館のご案内」静岡市清水区生涯学習交流館ホームページ（2018年8月6日取得、<http://www.sgk-shimizuku-shizuoka.jp/lending/index.html>）。

清水海隆

2003 『考察 仏教福祉』大東出版社。

鈴木宗徳

2015 『個人化するリスクと社会—ベック理論と現代日本』勁草書房。

全日本仏教会

2018 「全日本仏教会について」全日本仏教会ホームページ（2018年10月2日取得、[http://www.jbf.ne.jp/about/about\\_JBF.html](http://www.jbf.ne.jp/about/about_JBF.html)）。

鷹野良宏

2004 『日本仏教史イラスト付ノート』日本図書刊行会。

仏教民俗学会

1986 『仏教民俗辞典』新人物往来社。

身延山久遠寺

2018 「七面山登詣案内」日蓮宗総本山久遠寺ホームページ（2018年10月1日取得、  
<https://www.kuonji.jp/shichimenzan/shichi-history.html>）。